阿波おどり

徳島市では、毎年8月12日から15日まで日本最大級の阿波おどりが開催され、100万人以上が訪れます。阿波は徳島県の旧称で、Odoriは「踊り」を意味します。阿波おどりという言葉は、祭りと踊りの両方を指す場合があります。

祭りのルーツは400年以上前に遡りますが、徳島が戦前の昭和時代（1926年～1945年）に観光客への宣伝を始めたときに「阿波おどり」という名前が付けられました。徳島市を中心に、夏の間県内各地で踊りが繰り広げられます。祭りの期間中、街はカーニバルのような雰囲気になります。連と呼ばれる踊り子のグループは、伝統的な楽器を演奏する演奏者と共に、通りをパレードします。住民の皆さんの自慢の阿波踊り。阿波踊りの精神は、踊りの人気の歌「阿波よしこの」に最もよく表れているのではないのでしょうか。「踊る阿呆に見る阿呆 同じ阿呆なら踊らにゃ損々」

最高のチームワーク

阿波おどりの基本的な踊りのステップは男女同じですが、2つの異なるスタイルがあります。男性は踊るときに膝と足を外側に向けて低い姿勢をとります。女性は通常、下駄（木製サンダル）の前面でバランスを取り、手を高く持ち上げながらしっかりとした形で踊ります。男性は通常、法被（お祭りで着る短いコート）を着ますが、女性はカラフルな着物と、半月形をした編みこみの麦わら帽子、編笠を被ります。

子どもたちは1970年代から、阿波おどりに参加し、大人と一緒に踊りを披露してきました。近年では、一部の女性は伝統的な男性のスタイルと衣装を取り入れています。一部の団体は、「凧踊り」と呼ばれるフリースタイルのダイナミックな踊り方もあり、一人の男性がアクロバティックな演出を披露します。

演奏者は阿波おどりで重要な役割を果たします。鳴り物と呼ばれる伝統的な和楽器のアンサンブルが、ダブルタイムで躍動感のある音楽を踊りに提供します。鳴り物には大太鼓、締太鼓、横笛、三味線、鉦などが含まれており、テンポを合わせます。

毎年約800の連が出場し、さまざまなレベルの技を披露します。家族や同僚、大学生などのチームが存在します。踊り子達が通りをパレードするとき、連名の入った竹の棒の高張提灯（paper lanterns）を1人又は1人以上の踊り子が持って先導します。有名な連は一年中練習していますが、阿波踊りは民族舞踊であり、誰でも参加できます。ある時間帯では、皆誰もが踊りに参加できる「にわか連（ドロップインチーム）」もあります。

阿波おどりの起源

阿波踊りのルーツは、毎年夏に全国各地で行われている盆踊りにあると示唆している研究者もいます。その起源についてのある物語は、1586年に徳島城の完成をめぐる祝賀会に関連しています。徳島藩祖である蜂須賀家政（1558～1638）は、住民に無料で酒を配り、踊る様奨励したと言われています。1671年、お殿様は踊りを取り締まろうと、次の規則を発行しました。この習慣は定着したかの様に、後の記録によると、1671年に祭りをコントロールする為に、次のような規則が発行されました。

- 1.踊れる期間は3日間のみ。
- 2.武士は参加することを許可しない。
- 3.お寺の敷地で踊ることは禁止する。

近代阿波おどりの誕生

徳島の盛んな藍産業は江戸時代（1603～1868）の祭りを支え、19世紀の芸術作品に描かれた幸せなダンサーの群れは阿波大通が活気のある光景であったことを示唆しています。しかし、海外からの安価な合成染料の輸入により、20世紀初頭に藍の栽培が衰退し始めました。その後、徳島はイベントへの関心を高める手段として観光に目を向け、「阿波踊り」という名前が生まれました。

1931年、芸者で歌手の多田小餘綾（1907～2008年）が「阿波よしこの」をヒットさせ、阿波踊りの普及に貢献しました。第二次世界大戦直前と戦時中はお祭りは開催されませんでした。1946年に再開されました。1970年の大阪万博で初めて海外の観客にも広く見られる様になりました。その為、一部の団は海外でも公演をしました。

大阪万博は、踊りそのものに変化をもたらすきっかけにもなりました。万博の出演者は、観客を積極的にダンスの楽しさに引き込もうとしました。その後、阿波踊りはより洗練されたスタイルへと発展し、現在のような現象へと発展していきました。

徳島市を訪れる人は、阿波おどり会館(Awa Dance Festival Hall)で年間を通して公演を見ることができます。常駐連と様々なゲストチームによって毎日4～5回の公演が行われています。観客は最後に踊りに参加したり、衣装や楽器を鑑賞したりすることができます。見学後は、ビルの5階からロープウェイに乗って、街のシンボルである眉山の山頂を目指しましょう。